

## アジアカップの審判をして

国際審判員 安永三郎

2015. 9. 14~16

アジアダイビングカップが9月4日～6日、マレーシア・クアラルンプール「PUSAT AKUATIK NASIONAL」で開かれた。参加国は、日本、中国、韓国、マレーシア、マカオ、インドネシア、カタール、ウズベキスタンの8カ国であった。この大会の意味するものは何か、国ごとで違いはあるようである。来年の五輪の出場権を得るということにこの大会に位置つけるということである。もちろん日本もその中の1つである。この大会で優勝することができれば五輪出場資格を認めるということであった。それに一番近いのが板橋美波であると思う。練習を通して調子がなかなか上がらない。逆に下がっていったように見えた。もちろん試合に向けての調整の部分のわからないところもあるが、自分にはそう見えた。最初の練習から見て、出場は間違いないであろうという思いであった。技のきれ、難易率、技の完成度等から見て、間違いなく五輪に行くことができるであろう。ただ、怖いのは「若さ」であった。

参加選手が余り多くないので予選午前中、決勝午後から、試合、試合の空き時間は20分ということであった。大会を通して気のついたことは、上を向いてすべてを受け入れるということを一にすること。そして時には賢く、時には笑顔を振りまき、この大会期間、自分が主役になることが必要である。自分が主張するところは主張し、しないところはしない。そうメリハリをつけることが自分のパフォーマンスにも影響をすることと思う。残念ながら思うように得点が得られずにチャンスを逃してしまった。入水角度に関しても非常に厳しいものがあり、自分が4点くらいのところを1.5をつける審判もいた。いずれにしてもこちらが失敗演技をしてはいけない。最低でも普通の演技をしなくては勝てない。前4回半(109C)の水のチェックではそれができていなかったであろう。しかし、マレーシアの選手であったと思うがコーチが台の下に行き、水をかけて水面をわからせていた。これは他人の助力ではないのか疑問である。それとスコールの問題もある。夕方くらいになるとあたりが暗くなってスコールが降る。ラウンドの途中でライトがつく、これも多かれ少なかれ演技に影響を与える要因である。しかしこれらをイメージしてかからなければいけない。何が起こっても対処できるように自分の体をコントロールしなければならない。それから、板飛び込みであるがダブルステップが厳しく採られた感じがする。自分が8.5を出したとき5.5というかなり厳しい評価をする審判もいた。板踏みの技術は、今まで感じたことはなかったが韓国、マレーシアの選手がとくに強烈に板を踏むのが印象に残った。

また、ミックスシンクロという種目があり審判をした。男子・女子それぞれ1名ずつでチームを組みシンクロ演技を行うという種目である。この種目では交差することが許される。たとえば、201と301である。それとチームイベントである。1群から6群を男女一人3種目を演技する。日本ではまだ、未普及な種目である。とにかく国際大会となると、こういうイベントを行っている。FINAを通してオリンピックのメダル数を増やすことにつなげていくのかと思われる。

今回の遠征で五輪出場権を得ることはできなかったがチャンスは何回もない、一度であるといっても良い。その少ないチャンスをしっかりとものにしていかなければならない。この経験が必ず生きてくると思う。

この報告書を書いている期間に、メンタルトレーニングの白石 豊氏の講演を聞く機会があった。強くする人、ようは選手を強くしなければならない。それにはどうするか。選手の言語能力をあげ、選手の意思、選手がどうしたいのか主張、発表、分析、批判等の技術を上げる。つまりコミュニケーションスキルをあげていくことの大切さを話されていた。それらが感情をコントロールするために笑顔をつくることにつながり、さらにポジティブ・セルフトークにつながっていく。「大丈夫、大丈夫」「やればできる」「さあ、いくぞ」「集中、集中」などのポジティブなセルフトークに感情、魂がこもる。このようなことができなければメダルは取れない。できればメダルの可能性は十分にある。

最後に、この遠征に参加させていただいた日本水泳連盟、鳥取県教育委員会等に感謝申し上げます。